力動性因果連鎖に依拠する事象構造―変化事象を中心に―

江連　和章
（神奈川県立国際言語文化アカデミア）

要旨：
文や動詞の表す事象構造には、少なくとも事象内の因果構造と時間・アスペクト構造が示される必要があるが、本発表では、項構造の統語的具現に特に有用な因果構造に着目し、力動性因果連鎖(force-dynamic causal chain)に依拠する事象構造の有効性について考察する。Talmy (1988, 2000)により詳細に示された力動性(force dynamics)の理論は、程度の違いこそあれ、多くの事象構造研究がその基盤として仮定しているが、その中でも特に Croft (1991, 1998, 2012)は、事象内における力動性関係の因果連鎖を精密化し重用する理論を発展させてきた。本発表では、Croft の理論を基に、述語分解表示による詳細でより豊かな内容を盛り込んだ、包括的な因果連鎖依拠の事象構造を提示する。特に、力動性の概念と整合する所格論的(localistic)視点から、因果連鎖を構成する下位事象である変化(change)の構造を拡充し、物理的領域における二種類の変化、即ち、外的変化である位置変化と内的変化である（生成・崩壊も含む）状態変化を、意味領域を横断して統一的に記述することを試みる。更に、具体的な分析事例として、英語の被動(affectum)・達成(effectum)両目的語とその交替、場所格交替(locative alternation)等について考察する。以下に、本発表での主な具体的提案や主張を列挙する。

・力動性因果連鎖は第一義的には事象の参与者間の関係であるが、間接的に下位事象間の因果連鎖も形成する。
・（単文の場合）起因事象と結果（変化）事象の二つの下位事象を核として、最大限意図性から受益者・受害者への影響にいたる細かな因果連鎖を形成する。
・力の伝達(force transmission)は一方向だが、事象内で互いに作用し合う二つの参与者に同時に伝達されることを許容する。
・変化事象の構造として、物理的位置変化の基本構造に、(1)Theme の次元数と、(2)Theme と Path(Scale, Measure) の意味役割付与に関する二つの選択肢を組み込むことにより、外的変化と内的変化を統一的に記述する。更に、事象の計測(measure out)や焦点化操作と連動させることにより、被動・達成両目的語を対照的に記述する。
・場所格交替のような事例では、結果事象として二つの変化事象が連鎖すると分析できる。

最後に、事象構造と統語構造の関係性、事象構造が帰属する意味・概念構造と空間構造（cf. Jackendoff 2002）との関係性、統語論と意味論の境界のあり方について検討する。